天理教
江南支部だより

発行先	江南支部
発行日	立教187年３月1日
発行責任者	福西　努
発行住所	甲賀町上野461番地9

３月号　　NO284

朝の信仰読本

中山慶純著

ドナー体験で学んだおたすけの心

修養科に勤務中、一週間ほど休みを頂いて「憩の家」に入院しました。勤務に復帰した日、職員室に来た修養科生たちが、こっちを見てヒソヒソ話をしています。「あの人、どこかで見たことあるなあ」「毎日、朝礼台で『おふでさき』を読む人やんか」「ああ、ほんまや。ずいぶん休んでるさかい、忘れてたわ」……。たった一週間会わないだけで忘れられてしまうなんて、うかうか入院もできませんね。

それはさておき、私が入院したのは自分の病気治療のためではありません。実は、血液の身上を頂いた娘に、「ドナー」として骨髄液（こつずいえき）を提供するためでした。

骨髄移植は、白血球の型が一致する人からでないと受けることができません。しかも、その確率は、兄弟姉妹で二五パーセント、親子だと数パーセント以下、非血縁者では数百人から数万人に一人と、相当低いものだそうです。それが検査の結果、娘と私の型が一致すると分かったのです。この喜びは本当に大きなものでした。

また、当時の私は、病気やケガをしていない、常用している薬もない、血圧も血糖値も問題なし……と、文字通り健康体そのものでした。たとえ白血球の型が一致しても、ドナーの健康状態が悪ければ、移植は断念せざるを得ません。ありがたいことに、私はさまざまな条件をすべてクリアしており、ドナーとして適格と判断されたのです。

それにしても、親神様はなぜ、白血球の型を合わせ、体も健康な状態にして、私をドナーにしてくださったのでしょう。

おたすけに際して、親神様は、私たち人間が出す「真実」をお受け取りになり、ご守護くださいます。真実とは、人さまに喜ばれることは何かと考えて、とことん行動することです。

血液は、全身の細胞に栄養や酸素を送ったり、老廃物を運搬したりして、体中を絶えず駆け巡っています。この働きは、いわば体にとっての「真実」だと思います。親神様は血液の元である骨髄の移植を通して、「体をもって真実を出すおたすけをさせてやろう。このことを通じて〝真実を出す〟ということを、いま一度よく考えてみなさい」と思召されたのではないかと、私は悟りました。

親神様は、私たちようぼくをさまざまな御用にお使いくださいます。いつ、どこで、どんな人に出会わせていただくか分かりません。ですから、常におたすけの心を忘れずに、日々を通らせていただくことが肝心です。

お道の教えは真実の教えです。教祖は「みな真実を持つんだよ。言葉、行動に出し、態度にも表すんだよ」と望まれています。どんなときも真実を出し、おたすけに徹する。この精神を学び、身につけ、親神様、教祖にお喜びいただけるようぼくを目指しましょう。

みんなの教理勉強
だめの教えって素晴らしい

飯田照明

だめ（究極）の教えの何とありがたいことか！

教祖は地獄など古い教えの恐怖と呪縛から人類を解放された

再び言う。この世のほかに地獄などはない。

地獄を説く教えは、昔の迷信である。たとえ信者が何億人、何十億人いる世界宗教でも、また日本の最大の信仰集団だと言っても、地獄を説き、地獄へ行くぞと脅す教えは、本当の神様の教えではない。捨てるべき古い迷信である。本当の神様が、人間を永遠に苦しめるところを作られるはずはない。親神さまの「ふところ」に地獄はない。

人が死ぬ（出直す）と、親神さまの「ふところ」で休ませていただく。そして新しい身体をいただいてこの世に戻ってくる。死後に行き、暮らす天国や極楽、地獄などはないと教祖は教えられている。この世や現世を、天国や極楽にするようにしなさい、陽気ぐらしができるようにしなさい、と教えられた。

あの世のこと、死んだあとの世界や運命のことよりも、この世での幸せを何よりも大切にするようにと教えられた。

「二十一世紀は我々が救ける」とか、「我々こそ新しい世紀をになう宗教だ」と宣伝している宗教も、三大世界宗教もみな、地獄の恐ろしさを説いている。

死者を弔い、肉親を失った人たちの心を慰め、先祖を大切に思い、敬うこと自体は、人間として大切なことであり、葬式仏教などと悪口を言うべきではない。ご苦労さま、ありがとうございます、とその労をねぎらうべきであるが……。ただそういう信仰のレベルにとどまらず、元の神・実の神を崇め尊んでいただきたいものである。

はじめて、人類を長く苦しめ、悩ませてきた多くの迷信やタブーから解放された

日本の病院に四号という病室がないところが多い。四は死につながると患者さんが嫌がるからである。九という数字も苦を呼ぶといって避ける人もいる。

しかし、日本語の発音がたまたま同じであるというだけのことであり、他の言語だと全くナンセンスな迷信である。

キリスト教では、十三日の金曜日はイエスが十字架にかけられた日だとして肉を食べない。これならまだ分かるが、ユダヤ教には六百十三のタブーがある。安息日には、落ちたものも拾ってはいけないという。入れ歯を落としたら大変である。

次に多いのが上座部仏教で、比丘（男性の僧）は二百五十、比丘尼（尼僧）は三百五十の戒律がある。食べ物のタブーのため、抗争の絶えないところもある。

イスラームでは豚を食べるなと言い、

牛は食べるので、牛を殺さないヒンドゥー教徒と争いを繰り返している。人間が飢えて死んでいるのに牛がのうのうと歩き廻っている。食物のタブーによる気の毒な犠牲者と言える。

町で売っている暦をみると、時間や方角の吉凶や日取りを決める時の吉凶表が書かれている。また六曜がある。先勝は午前中は吉、先負は午後は吉、友引はどちらでもなし。赤口は正午と中間が吉、仏滅は凶で結婚式は避けよという。厄年というのがあり、男性は四十二歳、女性は三十三歳が厄年で、厄払いとか厄落としをしないといけないとされている。また十二支のように年には動物があてられ、縁起をかつぐ人も多い。

このように方角のタブー、日、曜日などのタブー、食物のタブー、女性差別を生む性のタブー、民族や人種のタブーなどが古くから人々を苦しめ、対立と抗争を生み、多くの人々を不幸にしてきた。今もしている。

教祖は、こうしたタブーから人類を解放してくださった。日については「皆、吉い日やで」とか「皆の心が勇む日が、一番吉い日やで」（『天理教教祖伝逸話篇』一七三）と仰せられ古くから冠婚葬祭で使われる、友引とか、仏滅などの迷信を一掃してくださった。

食物も、喜んで、感謝していただけば何を食べてもよいとして食物のタブーから解放してくださった「女松、男松のへだてない」とし、女性差別をなくし、人間は皆、兄弟姉妹であるとして、人種や民族差別の間違いを正してくださった。

こうして教祖は長い間人類を縛り、苦しめ、不幸にしてきた全ての迷信やタブーから人類を解放し、自由にしてくださったのである。

本当にありがたいことであり、その親心に心から深く感謝申し上げねばならない。

少年会滋賀教区団より
お知らせ

「わかぎの集い」

3月25日（月）10時～15時
詳しくは
所属教会又は最寄りの
教会へお尋ねください。

支部婦人会（福西麗子主任）
母親講座開催

支部婦人会は、1月14日午前10時より蔚山分教会を会場に母親講座を開催した。

係員を含める7名が参加、陽気チャンネル中山慶純先生「陽気づくめの生き方」を視聴し、フリートークを行った。

３月の支部にをいがけデー

３月２８日午前９時～
拠点教会　田堵野分教会　甲賀町田堵野528番地